

劣等感の構造 (3)

— 予備尺度の検討 —

安塚 俊行

The Structure of Inferiority Feeling (3)

— A Study of the Preliminary Scale —

Toshiyuki YASUZUKA

Abstract

Thirty-three students of a nursing school were asked to write about the inferiority feeling. From their descriptions, twenty-seven sentences were chosen as an inferiority feeling scale. Sixty-six students rated their own degree of sufferings on the five-point scales. From the factor analysis, four factors were extracted. They were respectively named the inferiority feeling factors concerning egocentric personality, appearance, introverted personality, and ability. These were partly corresponded to the results of my previous study. It is interesting to mention that two factors have been found about personality. Furthermore, it was pointed out not only the problem of the low factor contribution, but the validity of two rating criteria. Finally, a few promising methods were proposed as a future research.

目 的

看護専門学校生の作文を分析したところ、劣等感の対象は、自己の身体・容貌、能力、性格のみならず、周囲の家族・友人との対人関係にまで及ぶことが明らかにされた¹⁾。また高劣等感群と低劣等感群では、種々の性格特性において有意差が見出されている²⁾。しかし、作文内容から4種類の劣等感があると断定することは思弁的であるとの謗を免れないし、個々の性格特性と劣等感との関係についても定かでない部分がある。そこで今回は上記の点を踏まえて、劣等感の認知構造を統計的に把握すること、それによって劣等感尺度の作成を試みることの2つが主たる研究目的となる。

方 法

被験者——神奈川県内の看護専門学校生で1, 2年生の女子66名である(18歳—1名, 19歳—6名, 20歳—17名, 21歳—22名, 22歳—7名, 23歳—1名, 24歳

—2名, 27歳—2名, 31歳—1名, 34歳—2名, 36歳—2名, 37歳—1名, 38歳—1名, 39歳—1名)。

変量の選定——1年生33名に対して、劣等感の変量(項目)となりそうなものを次のような教示で書かせた。

「私たちは自分が他人より劣っているという感情すなわち劣等感を持つことがあります。そしてこの劣等感にはさまざまな種類があると考えられます。自分のことでなくてもかまいませんから、考えられる劣等感をできるだけたくさん挙げて下さい。例えば、身体に関するものと『私は背が低い』、また能力に関するものと『私は数学が苦手である』といったものがありますね。」

記入年月日は1983年6月17日、所要時間は約30分である、こうして列挙された変量は51種類に及んだが、曖昧、多義、類似性の観点から内容を精選し、最終的には下記の27変量に限定した。

- 1 私は足が短い
- 2 私はすぐ人の悪口を言う
- 3 私はネクラである
- 4 私は運動神経が鈍い

- 5 私は毛深い
- 6 私は頭が悪い
- 7 私は意地っ張りである
- 8 私は他人に対する思いやりが欠けている
- 9 私は引っ込み思案である
- 10 私は鼻が低い
- 11 私は英語が苦手である
- 12 私は記憶力が悪い
- 13 私は異性の友人が少ない
- 14 私は足が太い
- 15 私は字が下手である
- 16 私はわがままである
- 17 私は目が細い
- 18 私は胸が小さい
- 19 私は料理が下手である
- 20 私は太っている
- 21 私は人見知りをする
- 22 私は不美人である
- 23 私はおっちょこちょいである
- 24 私は短気である
- 25 私は人と話すのが苦手である
- 26 私は背が低い
- 27 私はささいな事でも気になる

評定基準——1, 2年生 66名に対して, 上記の 27 変量を次の 2つの基準で 5段階評定させた。

「あなたは左記の事柄に対してどう考えていますか。次の 2つの観点から答えて下さい。

まず客観的事実として自分に非常によくあてはまる場合には 5, 全くあてはまらない場合には 1 というように左上のものさしを参考にして 5段階で答えて下さい (最初のカッコ内に記入して下さい)。

次に, それぞれの事柄に対してどの程度悩んでいるか, その悩みの程度を右上のものさしを参考にして 5段階で答えて下さい (2番目のカッコ内に記入して下さい)。

回答月日は同年 7月 29日である。このように 2つの評定基準を設けたのは, 例えば「私は太っている」ということは事実として認めるが, それを素直に受け入れていて全く悩まないというように, 自己受容している被験者がいるかも知れないと考えたからである。実際にはこの 2つの基準を峻別する必要はないのであるが, その理由については後述する。

今回は「悩みの程度」について 66名, 27変量の因

子分析の結果を報告し, 「事実認識」については別の機会に譲ることとする。

結 果

1) 認知された劣等感

20歳前後の女子が挙げた主な劣等感の方法のところで述べた通りであるが, 「自分のことでなくても」という条件下でも投影メカニズムを考えれば, 自らの劣等感が表明された可能性が高い。そしてその内容は, 容姿, 能力, 性格, 対人関係など実に多岐に亘っていることがわかる。更に, 変量 2の「私はネクラである」に表現されるように, この世代は流行語に大変敏感であることがうかがえる。

2) 変量間の因子分析

始めに 27個の変量間の相関係数を求めた。それらを基に相関行列の対角成分である SMC (重相関係数の平方) を算出したのが表 1である³⁾。この場合, 標本相関係数が 0.243以上であれば母相関係数が無相関とは言えないのであるが⁴⁾, 全体として相関が高いとは言えないようである。

次に, この相関行列に因子分析法の一技法である主因子法を適用した⁵⁾。それは, 本研究が劣等感に関する探索的研究であり因子の予測がしがたいこと, 第 1因子から順次, 因子寄与を最大とするように因子を定める主因子法⁶⁾がこの目的に合致しているといった理由による。

表 2は規準化バリマックス回転前の結果である。10因子の寄与率は $(15.716/27) \times 100 = 58.207\%$ となり, 全変動の 6割近くが説明されたことになる。しかし, 第 5因子 (以下 F5 と記す。他の因子についても同様) 以降の因子負荷量が低いこと, 固有値 1あたりが抽出打ち切りの目安になることから⁷⁾, 4因子までが限度であると思われた。そこで回転は 4因子で行った。表 3がそれであり, 4因子の寄与率は 43.374% となっている。

3) 因子の解釈

表 3を基に, 各因子の因子負荷量が 0.5以上のものを取り出すと次のようになる。

F1

- 2 私はすぐ人の悪口を言う (0.539)
- 7 私は意地っ張りである (0.616)
- 8 私は他人に対する思いやりが欠けている

Table 1. Correlation matrix of 27 variables

	1	2	3	4	5	6	7	8
1	0.550							
2	0.154	0.491						
3	0.192	0.218	0.672					
4	0.108	0.126	0.281	0.399				
5	0.277	-0.114	0.239	0.243	0.456			
6	0.265	0.204	0.387	0.360	0.283	0.550		
7	0.075	0.378	0.296	0.057	0.015	0.194	0.607	
8	0.169	0.478	0.424	0.125	0.013	0.339	0.459	0.651
9	0.181	0.009	0.524	0.317	0.343	0.276	0.009	0.319
10	0.394	0.333	0.329	0.184	0.074	0.222	0.253	0.210
11	0.118	0.037	0.210	0.255	-0.006	0.387	0.203	0.172
12	-0.015	0.105	0.385	0.094	-0.003	0.523	0.096	0.424
13	0.203	0.371	0.359	0.381	0.338	0.325	0.196	0.280
14	0.363	0.071	0.207	0.156	0.183	0.302	0.287	0.193
15	0.098	0.175	0.343	0.239	0.071	0.256	0.162	0.341
16	0.181	0.322	0.440	0.171	0.017	0.162	0.427	0.427
17	0.387	0.174	0.160	0.067	0.040	0.266	0.080	0.132
18	0.286	0.107	0.080	0.154	0.074	0.190	0.002	-0.094
19	0.215	0.161	0.254	0.239	0.262	0.186	0.075	0.004
20	0.335	0.189	0.244	0.196	0.039	0.216	0.283	0.216
21	0.180	0.151	0.567	0.188	0.327	0.227	0.085	0.216
22	0.447	0.235	0.051	0.208	0.227	0.325	0.282	0.231
23	0.174	0.285	0.235	0.189	0.025	0.292	0.187	0.490
24	-0.032	0.285	0.124	0.072	-0.045	0.177	0.396	0.305
25	0.081	0.123	0.494	0.269	0.149	0.244	0.296	0.364
26	0.311	0.089	0.139	0.185	0.115	0.168	0.197	0.050
27	0.102	0.282	0.436	0.295	0.046	0.252	0.258	0.409
	9	10	11	12	13	14	15	16
9	0.634							
10	0.157	0.677						
11	0.094	0.214	0.452					
12	0.357	0.023	0.408	0.759				
13	0.306	0.330	0.242	0.251	0.560			
14	0.160	0.401	0.135	0.132	0.176	0.693		
15	0.277	0.187	0.306	0.435	0.366	0.187	0.575	
16	0.190	0.289	0.059	0.157	0.110	0.095	0.207	0.620
17	-0.010	0.364	0.271	0.191	0.276	0.279	0.121	-0.063
18	0.085	0.300	0.065	0.207	0.292	0.039	-0.019	0.092
19	0.272	0.255	0.048	0.030	0.308	0.094	0.058	0.251
20	0.021	0.449	0.070	0.002	0.265	0.648	0.309	0.233
21	0.583	0.313	0.106	0.321	0.356	-0.001	0.228	0.284
22	0.099	0.502	0.211	0.051	0.401	0.510	0.162	-0.036
23	0.210	0.163	0.242	0.379	0.190	0.253	0.517	0.412
24	0.067	0.308	0.168	0.301	0.086	0.136	0.132	0.397
25	0.463	0.133	0.238	0.234	0.314	0.177	0.322	0.142
26	-0.001	0.166	0.194	0.060	0.122	0.183	0.264	0.224
27	0.378	0.175	0.343	0.449	0.310	-0.104	0.353	0.356
	17	18	19	20	21	22	23	24
17	0.486							
18	0.283	0.437						
19	0.106	0.171	0.425					
20	0.430	0.101	0.175	0.686				
21	0.108	0.135	0.325	0.032	0.684			
22	0.411	0.143	0.168	0.514	0.011	0.662		
23	0.133	-0.037	-0.035	0.361	0.285	0.240	0.731	
24	0.053	0.066	0.231	0.192	0.145	0.197	0.466	0.610
25	-0.032	-0.063	0.063	0.177	0.382	0.176	0.253	0.098
26	0.095	0.035	0.249	0.201	0.073	0.258	0.152	0.159
27	0.037	0.119	0.160	0.027	0.303	0.079	0.463	0.455
	25	26	27					
25	0.483							
26	0.150	0.319						
27	0.274	0.085	0.643					

Table 2. Factor matrix (before rotation)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	0.420	-0.430	-0.187	-0.073	0.042	0.056	-0.165	0.009	0.022	0.365
2	0.436	-0.022	0.307	-0.231	0.187	-0.286	0.116	0.197	0.055	0.108
3	0.661	0.268	-0.212	-0.148	-0.144	-0.168	-0.113	-0.134	-0.225	-0.003
4	0.426	0.018	-0.236	0.026	-0.007	0.163	0.282	0.093	-0.061	-0.024
5	0.273	-0.074	-0.500	-0.079	-0.152	0.127	0.123	-0.050	0.248	0.114
6	0.582	-0.017	-0.129	0.285	0.089	-0.004	0.079	-0.248	0.100	0.151
7	0.463	-0.035	0.407	-0.229	-0.109	-0.181	0.252	-0.260	-0.040	-0.011
8	0.607	0.226	0.328	0.005	-0.148	-0.299	-0.012	0.013	0.154	0.192
9	0.505	0.336	-0.453	-0.048	-0.190	-0.017	-0.123	-0.001	0.148	-0.083
10	0.561	-0.395	0.009	-0.233	0.170	-0.081	-0.130	0.026	-0.102	-0.218
11	0.412	0.047	0.033	0.376	0.170	0.066	0.194	-0.139	-0.215	-0.040
12	0.515	0.396	0.027	0.485	0.217	-0.041	-0.179	-0.217	0.046	-0.022
13	0.587	-0.071	-0.258	0.016	0.134	-0.171	0.257	0.253	0.022	-0.056
14	0.453	-0.515	0.057	0.133	-0.360	0.038	-0.132	-0.207	0.075	-0.116
15	0.539	0.162	0.077	0.278	-0.148	0.137	0.007	0.271	-0.227	0.010
16	0.491	0.200	0.275	-0.447	0.001	0.153	-0.132	-0.104	-0.123	0.176
17	0.359	-0.429	-0.039	0.225	0.245	-0.167	-0.175	0.034	-0.082	0.021
18	0.227	-0.189	-0.219	-0.033	0.488	-0.041	-0.117	-0.025	-0.035	0.008
19	0.345	-0.082	-0.273	-0.341	0.169	0.209	0.095	-0.065	0.007	-0.055
20	0.506	-0.532	0.182	0.003	-0.235	0.054	-0.152	0.099	-0.121	-0.133
21	0.523	0.313	-0.399	-0.228	0.007	-0.040	-0.236	0.059	0.003	-0.100
22	0.503	-0.575	0.021	0.119	-0.028	-0.027	0.183	0.060	0.224	-0.051
23	0.590	0.169	0.365	0.174	-0.113	0.267	-0.202	0.276	0.150	0.063
24	0.436	0.114	0.436	-0.160	0.219	0.259	0.010	-0.128	0.226	-0.248
25	0.491	0.230	-0.122	0.027	-0.342	-0.131	0.160	-0.007	-0.089	-0.104
26	0.311	-0.168	0.023	-0.050	-0.030	0.314	0.166	-0.072	-0.199	0.185
27	0.563	0.431	0.115	-0.004	0.237	0.102	0.091	0.103	0.041	-0.025
EV	6.343	2.327	1.798	1.242	1.051	0.707	0.689	0.587	0.504	0.468

(0.564)

16 私はわがままである (0.702)

24 私は短気である (0.613)

これら5変量が一群を成すことは、F1とF2の関係を平面上にプロットした図1からも明らかである。従ってF1は、「自己中心性に対する劣等感因子」と考えることができよう。

F2

1 私は足が短い (-0.571)

10 私は鼻が低い (-0.585)

14 私は足が太い (-0.679)

17 私は目が細い (-0.573)

20 私は太っている (-0.700)

22 私は不美人である (-0.755)

図1から、これら6変量がF1と異なる他の一群を

形成することがわかる。そこでF2は「容姿に対する劣等感因子」と言えよう。

F3

3 私はネクラである (-0.608)

5 私は毛深い (-0.520)

9 私は引っ込み思案である (-0.690)

21 私は人見知りをする (-0.719)

変量5はこれらの中では異質である。そこで一応これを除外すると、他の3変量は「内向性に対する劣等感因子」と命名できよう。それはF3とF4の関係を示した図2によっても支持される。

F4

11 私は英語が苦手である (0.519)

12 私は記憶力が悪い (0.789)

15 私は字が下手である (0.559)

Table 3. Rotated factor matrix

	1	2	3	4
1	0.046	-0.571	-0.270	-0.023
2	0.539	-0.194	-0.068	0.071
3	0.323	-0.072	-0.608	0.310
4	0.049	-0.198	-0.383	0.222
5	-0.164	-0.198	-0.520	0.003
6	0.057	-0.330	-0.278	0.497
7	0.616	-0.215	-0.002	0.091
8	0.564	-0.087	-0.112	0.436
9	0.046	0.044	-0.690	0.308
10	0.337	-0.585	-0.260	-0.039
11	0.042	-0.199	-0.055	0.519
12	0.100	0.041	-0.158	0.789
13	0.106	-0.352	-0.461	0.262
14	0.099	-0.679	-0.007	0.143
15	0.209	-0.148	-0.150	0.559
16	0.702	-0.003	-0.253	0.016
17	-0.043	-0.573	-0.019	0.188
18	-0.048	-0.275	-0.241	-0.003
19	0.158	-0.204	-0.480	-0.140
20	0.274	-0.700	0.017	0.077
21	0.180	0.038	-0.719	0.177
22	0.097	-0.755	-0.049	0.131
23	0.480	-0.148	0.000	0.537
24	0.613	-0.081	0.020	0.189
25	0.198	-0.042	-0.383	0.349
26	0.167	-0.289	-0.114	0.060
27	0.444	0.108	-0.303	0.464
E V	2.829	3.236	2.886	2.760
%	10.478	11.985	10.689	10.222

23 私はおっちょこちょいである (0.537)

変量 23 は F1 にも負荷していることから判断を留保し、その他の 3 変量についてみると「能力に対する劣等感因子」を表していると思われる (図 2 参照)。

4) 2つの評定基準

上記の因子分析は「悩みの程度」という評定基準での結果であった。これによって悩みの対象の共変関係が明らかにされたわけだが、もう 1 つの基準である「事実認識」との関係についてはどうであろうか。それを明らかにするために、同一被験者における「悩みの程度」と「事実認識」の評定値間の相関係数を算出した。表 4 がそれである。いずれの変量も無相関とは言えない。従って 2 つの基準を積極的に設ける必要はな

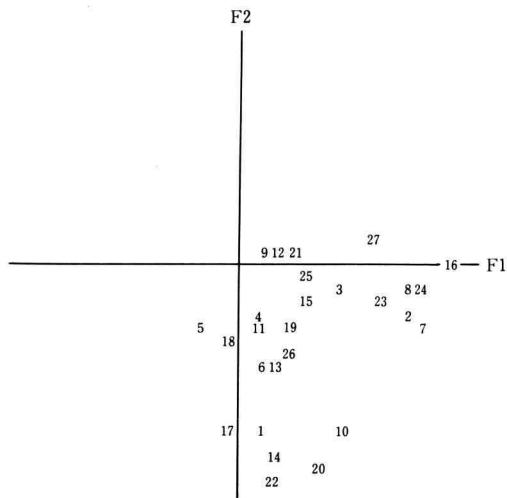


Fig. 1. Two-dimensional expression of F1 and F2

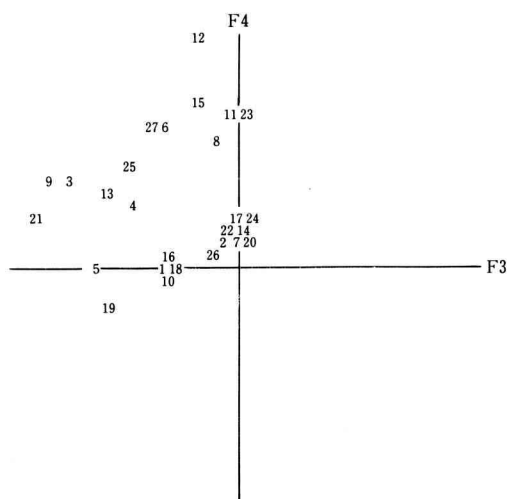


Fig. 2. Two-dimensional expression of F3 and F4

Table 4. Coefficients of correlation between two rating criteria

1	0.550	10	0.490	19	0.597
2	0.581	11	0.472	20	0.777
3	0.735	12	0.721	21	0.655
4	0.907	13	0.494	22	0.424
5	0.649	14	0.651	23	0.445
6	0.471	15	0.635	24	0.568
7	0.471	16	0.623	25	0.682
8	0.503	17	0.708	26	0.605
9	0.718	18	0.296	27	0.793

く、どちらか1つで十分であると言える。ただし、そのどちらがより妥当な基準であるかについては、更に綿密な検討が必要である。

考 察

まず、抽出された因子の性質についてであるが、容姿と能力の2因子は先行研究¹⁾で示されたものと同一である。性格に関しては自己中心性と内向性に二分された。これは20歳前後の女子は、自己の性格について漠然とした一般的悩みを持っているのではなく、性格の各側面に対して具体的、個別的な悩みを持っているためであると解釈される。こうした知見は、前回の報告で論じた劣等感のカウンセリング²⁾に貢献するものである。また、自己中心性が宮城の主張する勝気に、内向性が弱気に対応していることは³⁾、今回の結果の妥当性を高めるものとして興味深い。

第二に、因子の寄与率についてであるが、4因子で全変動の約43%と決して高いとは言えない。従って前述の因子の解釈もあくまで暫定的なものとして捉えておかねばならない。

第三に、本研究の目的に照らして劣等感尺度の作成を試みると、F1…5変量、F2…6変量、F3…3変量、F4…3変量、計17変量となる。しかし負荷量0.5に拘泥する必要はない。とりあえずは、表3の結果や因子ごとの変量数のバランスを勘案し、劣等感の予備尺度を再構成することの方が、より現実的である。この方法は上の寄与率の問題も同時に解決するので、是非取り組まねばならない事柄であると言える。

その他、「事実認識」基準での因子構造を明らかにし今回の結果と比較対照すること、同一データに直接パリアックス法など他の因子分析の技法を施すことなど

の方策も考えられるが、これらはすべて今後の研究課題としたい。

要 約

看護専門学校生に対する調査から、劣等感を記述した27個の文章(変量)が選定された。それらに対して、66名の被験者が悩みの程度を5段階で評定した。変量間の因子分析をしたところ4因子が抽出され、それぞれ自己中心性、容姿、内向性および能力に対する劣等感因子と命名された。性格に対する劣等感が2因子見出されたことは発達論の見地からも大変興味深い。

その他因子寄与率の低さが指摘され、今後の研究課題として二、三の有望な方法が提唱された。

文 献

- 1) 安塚俊行 1981 劣等感の構造(1) 幾徳工業大学研究報告 A人文社会科学編 第6号 15-19.
- 2) 安塚俊行 1982 劣等感の構造(2) 幾徳工業大学研究報告 A人文社会科学編 第7号 53-58.
- 3) 芝 祐順 1979 因子分析法 第2版 東京大学出版会 62-68.
- 4) 山内二郎 1977 簡約統計数値表 日本規格協会 63.
- 5) 渡 正堯・岸 学 1981 多変量解析プログラム集 工学図書 8-1~8-14, 付-11~付13.
- 6) 3)に同じ 16-17.
- 7) 海保博之 1980 心理・教育のためのデータ解析入門 日本文化科学社 121.
- 8) 宮城音弥 1969 日本人の性格 朝日新聞社 35-40.